

〔定家朝臣記〕康平五年正月廿日、有大饗事○略中

五獻侍從、宰相 次裏燒、

〔大饗次第〕嘉祐二年六月九日

居熱汁裏燒等 依康平例、今度可略之、

〔普廣院殿任大臣節會次第〕大饗之儀

次居裏燒役人同前

〔宇治拾遺物語十五〕今はむかし、天智天皇の御子に、大友皇子といふ人ありけり、太政大臣になりて、世のまつりごとをおこなひてなんありける。心の中に御門うせ給なば、次の御門には我ならんとおもひ給けり、清見はらの天皇そのときは、春宮にておはしけるが、このけしきを玄らせ給ければ、略 中御門○天智 病つき給則、吉野山のおくに入て法師に成ぬといひてこもり給ぬ。略 中軍○天智 をとゝのへて迎たてまつるやうにして、ころしたてまづらんとはかり給ふ、この大とものわうじの妻にては、春宮の御女ましければ、父のころされたまはんことをかなしみ給て、いかでこの事つげ申さむと覺しけれど、すべきやうなかりけるにおもひわび給て、鮒のつ、みやきのありけるはらに、ちいさくふみをかきて、おし入てたてまつり給へり。略 下

〔拾遺和歌集七名〕つ、み焼

わきもこが身を捨てしより猿澤の池のつ、みやきみは戀しき

〔新撰和歌六帖三〕ふな

いにしへはいともかしこしかた、ぶなつ、みやきなる中の玉章

〔類聚名物考飲食三〕鮒の和布卷 ふなのめまき

此ほどは妻にてまかる、伊勢守鮒となりてや口にのるらん

衣笠内大臣○家

祐見